

トマス・アキナスにおける子ども観

梅 沢 信 生
関東学院大学短期大学

トマス・アキナス(Thomas Aquinas)は1225年(又は24年)に生れ、1274年に死んでいる。彼は13世紀のヨーロッパの社会にあって、ドミニコ会の修士として、パリ大学、その他で活躍した。彼はそれ以前から教会の権威とされていたアウグスチヌスの教義をアリストテレスの思考方法によって解釈し直し、当時の教会の神学、哲学を確立する上で、重要な役割を果たした。その後ローマ・カトリック教会の聖人の列に加えられ、現在もなお、カトリック教会の神学や哲学の上に決定的な影響を与えている。

トマスの立場は至善主義的な立場に対しては至善主義の立場に立ち、アリストテレス的実証論に対しては、助力の恩恵(*gratia actualis*)と成聖の恩恵(*gratia sanctificans*)による救済を主張する。認識論的な哲学に対してはアリストテレスに基づく神学上の立場に立つ。しかしその神学上では稀世の聖人「トマス・アキナスの哲学の研究」の中で論じているように、経験主義と神学上の存在(*esse*)における結合という本質的な事柄をもつものである。

今回はトマスの著書である「神学大全」(*Summa Theologiae*)の中で、子ども観について述べている箇所を中心にトマスの「子ども観」を追求する。神学大全は後の神学に与える体系を示したものであり、そこでの論述は神学的な視座からのものであるが、トマスが本来神学者であることと見るとこの書とあわせてその「子ども観」を追求することは適切であると考える。なお以下に記述する神学大全の引用を設問(*questio*)と項(*articulus*)を用いるように記す。一巻が中心なので二巻は省略し、他の巻の時はその旨を記す。

◎魂と身体関係について

魂(*anima*)について「生命の第一の根源(*primum principium*)」(15-1)。「物体ではなく、身体という物体の現実態(*corporis actus*)に外ならない」(15-1)。「動かすものが魂であり、それ自身として動かされるものなるごとく動かすものもある」(15-1)。「知性と精神とが呼ばれるところの人間の魂は非物質的にて自存するもの(*aliquid subsistens*)である」(15-2)。「不可滅的なもの(*incorruptibilis*)なものである」と述べている。然し人間は単なる魂ではなく、身体

と結合したものである(15-4)。「それによって身を養い、また感覚し、また場所的に運動するところのもの、同じくまた何よりもそれによって知性認識するところのもの、こうしたものが魂である」(16-1)。「形相はそれよりも高貴なものであればある程、それにより高度に物質的原料を支配するものであるとともに、それだけまた物質的原料のうちに沈没することが少なく、故ってますます自己の働きやちからによって物質的原料を超越するものがあり……人間の魂はそのようなものである」(16-1)。「知性的魂は、単に知性認識のちからのみならず、さらに感覚するちからをもつことを要した。だが感覚というのは身体的な器官なくしては成り立たない。知性的魂はそれゆえ、感覚の高貴な器官たりうるごとくそうした身体と一つと成ることを要した」(16-5)。「人間の身体が最も近接的な目的は理性的魂、なうびにこれらの諸々の働きである。神は人間の身体を動かす諸々の働きへの適合という見地よりする最善の態勢において設定した」(91-3)とする。

◎身体と魂の創造(*creatio*)について

トマスは設問90と91においてこのテーマを追求する。そこで彼は魂を神の一部とする汎神論的な考えを否定するとともに(90-1)、魂を神以外のものとして造られたものとする考えも否定し、魂とは神のみによって創造され、存在せしめられたものとする(90-2,3)。身体を至善的に規定する思想を前にて、最初の人間の身体は神によって直接創造されたもの(90-2)、人間は造られた態勢(*disposito*)をよめられたもの(91-3)、神自身の技術作品(*artificata*)である(91-3)とする。そして魂は身体と一つになっただけでなければ本性的完全を有しないものであり、魂の創造と身体への創造は同一時であるとする(90-4)。

◎人間産出の目的(*finis*)と終極(*terminus*)について

トマスはここにおいて神の像(*imago Dei*)の問題を追求する。神の像の問題はキリスト教の人間論において永久のテーマであるが、彼は人間のうちに何らかの神の似像(*similitudo*)の存在を認めるが、神の像(*imago*)は不完全な形でしか存在しないとする。聖書が「神の像のごとく」(*ad imaginem Dei*)と述べている“ad”という前置詞は「接近」を意味するとい、「接

近ということも隔ったものについてこそふさわしい」とする(93-1)。然し神の像は全ての存在の内題ではなく、知的被造物のみの内題である(93-2)。全ての人間に神を知性認識し、愛することへの自然本性的な適性(*aptitudo naturalis*)があるという意味での神の像はあらず、不完全ではあるにしても現実的に(*actu*)乃至は能力態的に(*habitu*)神を認識し、愛するという意味での神の像は義人のみのものであり、神を完全存在として現実的に認識し愛するという意味では至福者のみにおけることである(93-4)と述べるあたりでは、神の像はキリスト教的理想像の追求の内題になっている。後において人間とは“*Man made to God's image*”なるものとする。

命魂と胎児について

トマスは人間の魂を栄養摂取的(*nutritiva*)、感覚的(*sensitiva*)、知性的(*intellectiva*)の三つの部分を持つと述べる(96-3)。そして胎児は感覚的な魂しかもっていないが、それがやがて成熟し、感覚的であると同時に知性能力的であるとき、より完全な魂が所有されるとする(96-3)。人間の魂が胎児においてどのように身体に宿るかについて設問118において詳述している。そこでトマスは感覚的魂と知性的魂の産出を分けて述べる。「感覚的魂は質料を可能態から現実態へ移行せしめるべき何らの物体的能動者(*corporalis agentia*)によって、かかる能動者のうちに存する何らかの物体的なちから——胚種(*semen*)のうちに存する力——をもって存在のうちに産出される」(118-1)とするが、知性的魂については、それは生みの親に起因するものではなくて、あくまでも神の創造による主張する(118-2)。又知性的魂の創造の時トマスはオリガネズなどが万物の創造と同時に創造されたものの偶然人間の身体と結合したと述べるのに反して、身体なしに魂の存在することはその自然本性に反することであり、身体が与えられるその時、魂は神によって創造されると述べる(118-3)。

命魂の交合について

身体論において食欲、性欲をどうみるのかということとはよくこのときないうテーマである。当時は肉欲に対する不定的な見方の強い状況にあったが、トマスは積極的な立場でこの内題に取り組んでいる。彼は「無垢の状態」(*status innocentiae*)における人間の食欲、性欲の内題としてこれらのテーマを扱う。そして無垢の状態における人間は食物を必要とする霊的生命(*vita spiritualis*)ではなく、食物を要する魂的生命(*vita animalis*)であり、人間はその自然本性上、

可滅的な被造物と不可滅的な被造物との中間者たる位置におかれているため、可滅的な身体側面においては生み(*generatio*)ということが必要になる(98-1)とし、「罪以前にあつてもやはり人間の営むところであつた魂的、動物的な生(*animalis vita*)に属するがぎり、交合によって生むということは、他の完全な動物の場合におけると同様、人間にとって自然本性的なことである」(98-2)としている。

命魂の生るべき子供の境位(*conditio*)について

トマスは生るべき子供の境位について、身体、義、知の三つの内題を扱っている。当時身体を乾湿、冷暖の配合という視察よりみる見方があり、だが、トマスは小児が運動能力の未発達なのは「脳の湿太な」(*humiditas*)の故であるとしている(99-1)。アリストテレスの「ア=マ」において運動能力の座は心臓である(3巻9-11章)が、彼は当時の医学に基づいて頭脳にあるとしている(99-4)とも注意すべきであろう。

子供の義については原罪(*peccatum originale*)と原初義(*originalis iustitia*)も親から子に伝わるとしている(100-1)。しかし無垢の状態においても子供が不滅な者として(*in iustitia confirmati*)生れることはなかつたとしている(100-2)。知に關しては知は感覚を通じて獲得するのが自然本性的であり、身体と魂の合一をとおして知を獲得するものであるとする(101-1)。

命魂の受胎との関係で

「マリヤが無垢のまやどり」という内題は一般の子供の受胎に就いても一つの視察を提供する。彼はこのテーマを幾度回して扱う。マリヤは因において懐胎されたが原罪をうけて、誕生前に魂によって聖化された(29-1)。そしてその時期は後世への魂の注入以前ではなく、魂の注入後においてなされた(29-2)と述べる。

以上「神は大全」を通じてトマスの述べるところをみてきたが、トマスの基本的な視察は人間をどう存在(*esse*)という視察で捉えようとするところにある。そしてそれは現在われわれが子供をみる時にも最も基本的な視察なのではなからうか。

マリヤ論において胎児と肉体的受胎と魂の注入に分けてみることを示したことは設問118と共に胎児論とこの注目すべき。特に胎児問題などに対してどのような問題を扱ったかがわかるであろうか。

〈資料〉

創文社版「トマス・アクィナス神学大全」、印見版「トマス・アクィナス」外。参考文献は省略。